



統計から社会の実情を読み取る

第63回 子供に教えたいための「徳目」から見た国民性

本川 裕 | Honkawa Yutaka
アルファ社会科学(株)主席研究員

■ 東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年) 等。ダイヤモンド社のダイヤモンド・オンラインにWebコラム「本川裕の社会実情データ・エッセイ」を連載中(隔週)。



はじめに

子どもにどのような徳目を特に教えたいたいかと いう設問が国際比較調査でしばしば調査されている。この結果から、世界各国の国民性を探ってみよう。

どの国でも、子どもはまだ社会性が身に付いていないので、友達同士で喧嘩やいじめなどのトラブルがおこりがちである。親は、こうした点を心配しながら、子どもの将来にも配慮して、重視すべき精神態度を子どもに教えるのだと思われる。調査対象者が、身に付けるべき社会性に特に意を用いて回答することから、自分が重視する徳目ではなく、子どもに教えたいための「徳目」で国民性を探るのはなかなか賢い方法だと考えられる。

国際比較調査としては、まず、調査対象国数が多い世界価値観調査を取り上げ、その後、これを補完する意味で、アジアや日本の特性を浮き彫りにしている別の2調査の結果を紹介することとする。

大陸別の国民性パターン

表1に、世界価値観調査(及び一部欧州価値観調査)の結果から各国の国民が重視する徳目(資質、qualities)として何を多く挙げたのかについて、上位3位の順位を示した。4位以下はわざらわしくなるので表示を省略した。参考のために図1には、調査票の日本語版と選択肢の英語表現を掲げておいた。

各国が何をトップに挙げているかに着目し、結果を大きく概観すると大陸別に一定のパターンがある点が明らかである。

まず、ヨーロッパ、歴史的にヨーロッパからの移民がつくった国が多い南北アメリカ、オセアニアでは、寛容性と責任感が1位か2位になっている国が大勢を占めている。こうした回答パターンを「ヨーロッパ系」と名づけておこう。

自主性を重んじる国民が多いのもヨーロッパ系の特徴である。「自分の言葉・行動に責任をもちなさい」という責任感の教えや「我が道を行きなさい」という自主性の教えの影響下では、自然と自己主張が激しくなり、意見の対立から

表1 子どもに教えたいための項目（世界価値観調査、2010年期）～五つまでの複数回答結果の上位3位の項目～

		自主性	勤勉さ	責任感	想像力・創作力	寛容性	節約心	決断力・忍耐力	信仰心	公正さ	従順さ	自己表現力		自主性	勤勉さ	責任感	想像力・創作力	寛容性	節約心	決断力・忍耐力	信仰心	公正さ	従順さ	自己表現力
ヨーロッパ・オセアニア	フランス*	3	2		1								アジア(続き)	シンガポール	1	3	2							
	ベルギー*		2		1	3							マレーシア	2		3		1						
	ポーランド		2		1	3							パキスタン		3	2			1					
	スウェーデン	3	2		1								インドネシア*	3		2								
	イスラム	3	2		1								イラク		3	2			1					
	オーストラリア	3	2		1								パレスチナ		3	2			1					
	ニュージーランド	3	2		1								ヨルダン		3	2			1					
	英國*	3	2		1								クウェート		3	2			1					
	アイスランド*	2	3		1								カタール		3	2			1					
	ノルウェー*	2	3		1								イエメン			2			1					3
	オランダ	3	1		2								アルジェリア		3		2		1					
	フィンランド*	3	1		2								エジプト	2				3						
	キプロス		3		1	2							モロッコ	2	3									
	スペイン	3	1		2								リビア		3	2	1							
	アンドラ*	3	1		2								チュニジア	3	1	2								
	イタリア*	3	1		2								イラン*	3	1	2								
	ドイツ	2	1		3								レバノン	3	1		2							
	ハンガリー*	2	1		3								バーレーン	1		2	2							
	ルーマニア	1	2		3								トルコ		1	2		3						
	セルビア・モンテネグロ*	3	1	2									ロシア・旧ソ連											
	ブルガリア*		1	2			3						ロシア		1	2		3						
	スロベニア	1		2	3								ウクライナ		1	2		3						
南北アメリカ	米国		2	3	1								ベラルーシ		1	2		3						
	カナダ*	3	2		1								モルドバ*		1	2		3						
	チリ			2	1		3						グルジア		1	2		3						
	ウルグアイ		2	1				3					アルメニア		1	2		3						
	コロンビア	2	1					3					カザフスタン		1	2		3						
	メキシコ		2	1									キルギス	3	1	2								
	トリニダード・トバゴ				1			3					ウズベキスタン		1	3		2						
	グラテマラ*		1		2			3					アゼルバイジャン		2	1		3						
	ブラジル	3	1		2								エストニア	2	1		3							
	エクアドル		1		2								マリ*		1		2		3					
	ペルー		1		2								ジンバブエ		1		3							
	アルゼンチン				1		3						ブルキナファソ*		1		3							
アジア	中国	2	1	3									ガーナ					3	2					
	タイ		1	2		3							ザンビア*		1			3						
	フィリピン	3	1	2									ナイジェリア		1			2	3					
	ベトナム*		1	2			3						南アフリカ	2	1	3								
	韓国		3	1		2							ルワンダ		2	1								3
	香港	2	1		3								エチオピア*	1	2			3						
	台湾	3	1		2																			
	日本	3	1				2																	
	インド	3	1				2																	

注) 各国の全国18歳以上男女1,000サンプル程度の回収を基本とした意識調査の結果。2010年期は各国2010~2014年の調査。ただし、*印の国は2005年期(2005~09年)、ベルギー、アイスランドは2009年の欧州価値観調査による。11項目の中の五つまでの複数回答結果による順位。

ただし、2005年期には「自己表現力」の選択肢がなかった。また、欧州価値観調査は「行儀よさ」が加わっているが、順位はこれを除く。

資料) 世界価値観調査及び欧州価値観調査

図1 世界価値観調査の調査票（世界標準版の英語表現つき）

問5 ここに、家庭で子どもに身につけさせることのできる性質が列記されています。この中で、あなたが特に大切だと思うものを一つあげて下さい。

(5つだけ印)

1 自主性	Independence
2 勤勉さ	Hard work
3 責任感	Feeling of responsibility
4 想像力・創作力	Imagination
5 寛容性（他人の立場・意見を尊重する）	Tolerance and respect for other people
6 節約心（お金や物を大切にする）	Thrif, saving money and things
7 決断力・忍耐力	Determination, perseverance
8 信仰心	Religious faith
9 公正さ（利己的なふるまいをしない）	Unselfishness (in Spanish: "generosity")
10 従順さ	Obedience
11 自己表現力	Self-expression

注) 2010年期の調査票(2005年期)はない「自己表現力」が追加された。

子供同士のトラブルがふえるので、「お互い相手の主張を認め、尊重しあいなさい」という寛容の精神の教えでバランスを取り、社会が分裂しないようにしていると考えられる。寛容はいわば「上から目線」の者同士の妥協の精神であり、多数決原理の民主主義の存在意義もここにある。以下、回答パターンが意味するものに関するこうしたコメントは私見の要素が強い点を了承されたい。

次に、中東・北アフリカとアジアの一部では、信仰心を1位に挙げる国が多くを占めている。これらの地域が日々の宗教生活を社会統合にむすびついているイスラム圏と重なっていることからこうした結果になっていることは言うまでもなかろう。この地域では、寛容性か責任感が2位となっている場合が多い。

かつてはヨーロッパもキリスト教圏として、現在のイスラム圏と同じパターンであったが、惨禍をもたらした宗教戦争への反省などから信仰心による社会統合を放棄し、世俗主義に大きく舵を切って、現在のようなパターンに至ったと考えることが可能だろう。

続いて、ロシア・旧ソ連とサハラ以南アフリカの地域では、勤勉さを1位に挙げている国がほとんどを占めている。勤勉さを重視するのは、立身出世志向のあらわれとも見えるが、むしろ、政治や伝統社会が提供する社会ルールに対し個人としては中立的な態度をとる習慣から、子どもに対しては「余計なことを考えず将来のため一生懸命に勉強しなさい」とさとす親心からだろう。ロシア・旧ソ連では2位が責任感となっている場合がほとんどであるのに対して、サハラ以南アフリカでは2位が従順など責任感以外である場合がほとんどであるという違いがある。この二つの地域は、そうした点からは別グループの国民性をもっていると判断した方がよ

いだろう。

最後に、アジアについては、以上の地域と異なり、大きく括るのが難しいのが特徴となっている。パキスタン、インドネシア（グループC）が同じイスラム圏の中東・北アフリカに近いパターンとなっているほか、勤勉さが1位の中国、タイ、フィリピン、ベトナム（グループA）と責任感が1位の韓国、香港、台湾、日本といった東アジア儒教圏・インド（グループB）とに分かれている。グループAは2位が責任感となっている国が多くロシア・旧ソ連と近い。一方、グループBは、2位が勤勉さであれば、勤勉さが1位のグループAと同類といったほうがよいかもしれないが、韓国を除いてそうではなく、やはり別グループの性格が強い。また、責任感が1位のグループBは、だからといって寛容性が必ずしも2位とはなっておらず、その点、ヨーロッパ系とは異なる。

「アジアはひとつ」という岡倉天心の有名な言葉があるが、アジア地域のこうした統一性のなきを知ると、他の大陸と比較して「ひとつ」感が薄いと言わざるを得ない。

大陸別の国民性パターンから外れた諸国

ヨーロッパの中で、ルーマニア、セルビア・モンテネグロ、ブルガリアといった東欧諸国では、勤勉さが1位となっており、寛容性と責任感が1~2位というヨーロッパ系の傾向とは異なっており、むしろ、ロシア・旧ソ連に近い。旧社会主義圏という共通性がこうした結果をもたらしているのだろう。社会主義圏だった東欧の中でもポーランド、ハンガリーはヨーロッパ系と同じであり、西欧に近い国民性がうかがわれる。スロベニアは自主性が1位であり、やや特殊である。

南北アメリカは、上述の通り、寛容性と責任感が1～2位である点でヨーロッパ系のパターンであるが、カナダを除いて3位が自主性ではない点、また、南米では、しばしば、従順さが3位に来ている点がヨーロッパとやや異なっている。ヨーロッパや北米では従順さはけっして3位までに現れない。

なお、米国は2位が勤勉さとなっている点がヨーロッパ系の中では特殊である。トリニダードトバゴも1位は寛容性だが、2～3位が従順さ、信仰心である点で異質である。

南米のアルゼンチン（2013年調査）は節約心が1位である唯一の国である。アルゼンチンでは、2001年の債務不履行（デフォルト）による経済的困難がよほど厳しいものであったのが尾を引いているからだと思われる。2位に節約心が来ている唯一の国である韓国（2010年調査）も1997年にIMF危機とも呼ばれるアジア通貨危機によって非常に大きい経済的な困苦を経験している。実際、両国とも2000年期の調査では「節約心」は上位3位までに登場していない。

先に、中東・北アフリカは、信仰心が1位である点が共通だといったが、実は、リビア、チュニジア、イラン、レバノン、バーレーン、トルコは、信仰心が1位でないどころか3位までにも現れず、バーレーン、トルコを除くと、寛容性か責任感が1位というむしろヨーロッパ系に似たパターンとなっている。欧米文化の影響などでイスラム圏でありながら世俗主義がかなり浸透している結果といえよう。トルコの回答結果の順番はロシアや旧ソ連の多くと全く同じであり、ある意味ではロシア・旧ソ連圏に属するといつてもよい。

アジアのうち、中国を除く東アジアの儒教圏諸国では責任感がトップとなる傾向があるが、

そのうち香港と台湾では寛容性も重視している。また、東南アジアのシンガポールでは自主性、マレーシアでは寛容性が1位となっている。これらの国は、ヨーロッパ系と似た精神態度となっており、欧米化が進んでいると解することもできよう。

日本は決断力・忍耐力がインドとともに2位である点が他国民にない特徴である。日本とインドで3位までの徳目が全部共通なのはたまたまなのかが気になるが解釈は難しい。

以上のように、子どもに教えたいたい徳目として何を重んじるかという調査を見ると、国民性の違いがほぼ大陸別にグループ化できる。また、グループの一般傾向から外れている国はその理由が合理的に説明できる場合が多いことから、それだけ国民性のグループ化の有効性が認められる。

アジアや日本の特徴

欧米人の視点から選択肢を設けている世界価値観調査を補完する意味で、ここでは、やや古い調査だが、日本人の視点から選択肢を設けた二つの調査の結果を掲げた。

表2に掲げたアジアパロメーター調査におけるアジア7か国の調査結果を見ると、多くの国で独立心、勤勉、正直が上位3位となっている点が共通である。韓国の場合には勤勉が上位3位に入らず、誠実が1位となっている点が少し異なり、日本に至っては、正直しか上位3位の共通性がなく、むしろ、思いやりが1位となっている点でアジア一般とはかなり異なっている。日本の場合、韓国と並んで忍耐がやや上位だが、これから類推すると世界価値観調査における日本人の特徴だった「決断力・忍耐力」重視は忍耐という側面の重視だったということができる。

なお、このアジアバロメーター調査の結果は、当連載第41回「似ているようで似ていない東アジア人」(2014年12月号)により詳しく紹介しているので参照されたい。

表3に掲げた総務庁(当時)による日米韓比較調査では、日本の場合は、表2の結果と同じように「思いやり」が首位である点が米韓と異なる大きな特徴となっている。同じ儒教圏でも韓国は礼儀正しさが1位であり、思いやりはむしろ11位と低い点で日本と大きく異なる。

このようにアジアの中で、そしておそらく世界の中でも、日本は、思いやりを最重視する点で、極めて特異な国民性を有すると結論づけられよう。日本人は、場合によっては眞実を見ない振りをして行動することでトラブルを避ける「思いやり」方式が大得意となっている。日本では自分を正当化する主張をしたいときにも、黙って忍耐する精神を親から教わっているのである。忍耐は、西欧的価値観からは敵への屈服や圧政者への忍従と見られがちだが、実は、仲間から脱落者を出さずに集団の力を保持しようとする粘り強い精神なのである。

内向きには有効な対立回避法である「信仰心」だけでなく、上から目線どうしの対立回避法である「寛容」も、最近のイスラム、欧米及びロシアにおける「文明の対立」を見ていると、限界があらわになっているようである。そうであるなら、グローバリゼーションが進み、世界がひとつの島国になりつつあるような現代においては、お互い逃れられない狭い島国で日本人が長い間に培ってきた対立回避法である「思いやり」の出番もあるのではと私は感じる。

表2 子どもに教えたいための項目(アジアバロメーター調査、2006年)
～二つまでの複数回答結果の上からの順位～

	独立心	勤勉	正直	誠実	思いやり	謙虚さ	信仰心	忍耐	競争心	年長者を敬う	教師に従う
中国	1	2	3	5	9	8	11	7	6	4	10
台湾	3	1	2	6	7	5	10	7	9	4	11
ベトナム	3	1	2	5	8	7	11	6	10	4	9
香港	3	2	1	5	6	7	9	8	10	4	11
シンガポール	2	3	1	5	9	6	7	8	10	4	11
韓国	3	4	2	1	7	6	9	5	11	8	10
日本	4	7	2	3	1	8	9	5	10	6	11

注) 調査は、全国の20~69歳男女(ベトナムは都市部のみ)が対象。サンプル数は各國約1,000人(ただし中国は2,000人)。層化多段階無作為抽出。面接調査。

資料) AsiaBarometer 2006

表3 親が子供に望む性格特性(総務庁調査、2004年)
～複数回答結果の上からの順位～

	他人のことを思いやる心	規則を守り、人に迷惑をかけない公共心	責任感	礼儀正しさ	人前で自分の意見をはつきり言う力	忍耐強さや粘り強さ	協調性	自分で物事を計画し実行する力	金銭や物を大切にする心	公正さや正義感	独創性やはつきりした個性	落ち着きや情緒の安定	指導力
日本	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
米国	4	7	1	5	10	12	13	8	11	2	9	3	6
韓国	11	3	2	1	5	6	8	4	13	10	12	7	9

注) 0~15歳の子供をもつ父親又は母親が対象。有効回収数は日本1,015人、米韓それぞれ1,000人。

資料) 総務庁青少年対策本部「子供と家族に関する国際比較調査」(平成6年度)